

ふぞろいの林檎たち

映画文学人生論

山田太一 (1934-) 『ふぞろいの林檎たち』 (1983~1997)
演出：井下靖央 大山勝美 赤地偉史
出演：仲手川良雄 中井貴一 宮本晴江 石原真理子
岩田健一 時任三郎 水野陽子 手塚理美
西寺実 柳沢慎吾 谷本綾子 中島唱子
本田修一 国廣富之 伊吹夏恵 高橋ひとみ

昔はさ、学校どこって聞かれるのいやだったけどよ、今度は、会社どこって・・・

日本人（私をふくむ）が小説を読まなくなり、映画館に足をはこばなくなって、文学の衰退と映画の斜陽化という現象がはつきりしてきた時代の境目は一九七〇年（昭和四十五年）頃だと思う。

それから二十世紀末までの三十年間は金融バブルをはさんで、日本人の大多数（私をふくむ）は物質的価値や直接的な快楽をもとめ、文学や映画などはもとめなかったような気がする。

その三十年間の日本人の生活と風俗習慣をふりかえり、反省したいと思うが、当時の世相をしるぶことができるような作品に何があるか。関心がなかったのか、私の記憶はほとんど空白に近い。

二十一世紀になって私はヒマになり、DVDで昔の映画を観る機会に恵まれた。なかでも面白いと思ったのは山田洋次監督の『男はつらいよ』。

このシリーズは一九六九年から一九九五年まで二十六年間につくられた四十八本の映画で、当時の世相の一端をしるぶことができる貴重な文化遺産だ。ただし、もともとは昭和四十三年から四十四年にフジテレビが制作・放映したテレビドラマが原型で、まずテレビドラマで成功し、その勢いで映画化されたという経緯がある。

どうやらその頃から映画よりもテレビドラマの勢いが強くなっていったようだ。とすると、テレビドラマにも質的に当時の世相を反映した作品があ



ふぞろいの林檎たち

映画文学人生論

るかもしれないと探しているうちに、山田太一作の『ふぞろいの林檎たち』のDVDを見つけた。

- パート1 昭和五十八年 (1983) 大学生
- パート2 昭和六十年 (1985) 新入社員
- パート3 平成四年 (1991) 三十歳手前
- パート4 平成十年 (1987) 三十代後半

舞台は東京の下町。時代は二十世紀後半の十四年間、登場人物は国際工業大学の落ちこぼれ学生三人、看護学校の美人二人、デブの不美人女子大学生一人、人づきあいが苦手の東大生一人、風俗店でバイトをする東京外大の美人学生一人など。

彼らは映画『男はつらいよ』でいえば、フーテンの寅さんの甥の満雄とほぼ同じ世代だ。満雄はとら屋一家の希望の星として生れ、小学生、中学生、高校生までは順調だったが、大学受験と就職では国際工業大学の三人と似たような落ちこぼれの悲哀を味わう。時代のキーワードは格差だ。

そんな格差社会の底辺に近いところでもがきながら生きる若者の悲哀は、西寺実（柳沢慎吾）のぼやきによりリアルに表現されている。

「昔はさ、学校どこって聞かれるのいやだったけどよ、今度は、会社どこって聞かれるとつらいんだよな。まいっっちゃうよな」。

笑ってもつとBaby むじやきんOn my mind

映ってもつとBaby すじきんIn your sight

サザンオールスターズ「いとしのエリー」